

# 「木の建築大賞」受賞

## オール県産材のエコ園舎

ピオ・ハウス  
・ジャパン

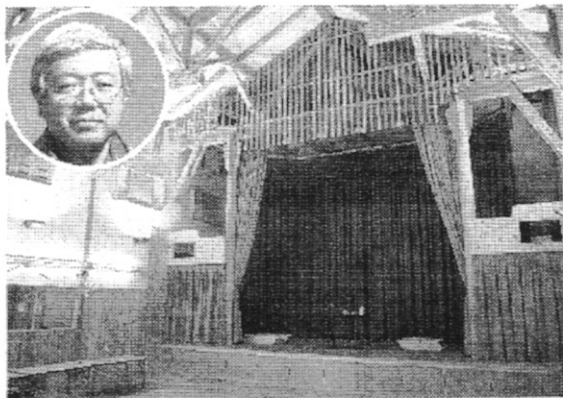
大学発ベンチャーのピオ・ハウス・ジャパン1級建築士事務所（前橋市、石川恒夫社長）前橋工科大学大学院准教授）は、作品「県産材100%の未来を育む木造幼稚園」がNPO法人木の建築フオラム主催の第7回木の建築大賞を受賞した。地域技術を結集した公共建築のあり方が高く評価された。

受賞作品は高崎市の八幡幼稚園。木造在来工法2階建て、延べ床面積約700平方メートル。旧園舎の老朽化に伴う改築で、隣地には姉妹園としてのRC造2階建ての保育園がある。

そこで近い将来における「認定子ども園」としての連携も視野に入れた。また仮設建築を最低限に抑えながら、変形した敷地に沿って設計された。

立方形で、すべて県産材を活用。30センチフロアリングの床仕上げ（下地合板は使用しない）、天井は厚さ90センチの釘打ち集積パネル（BSパネル、杉90センチ×2700センチ）で接

県産材100%で建てた八幡幼稚園  
（円内は石川准教授）



途に応じて3種類のトラス架構を考案した。

着剤を使わず、そのまま内装仕上げ。保育室・遊戯室は、園児を強く柔らかく守る器としての無柱空間を可視化するために、規模・用

経済の活性化を図った。製材工場、プレカット工場、施工会社、構造設計などすべて半径33キロ圏内にある。この園舎はNEDO

の助成も受けており、自然エネルギーを利用して地域・地球環境に負荷を掛けないことを目指している。教室への出入りは南側に広がる幅2・4メートルの外廊下を使用、その上部は屋上緑化を行い、園庭と一体感を持たせている。遊戯室などに採用の丸柱は、製材工場と協力して行った新月伐採樹を使用している。「子どもたちが明るく元気に、健やかに育つ建物として、木が良いことを端的に示している。地域材の活用による大型木造建築が可能であり、住宅スケー

ル的な材を使うことにより、コストも抑えることができた」（石川社長）と語る。

ほぼすべての躯体材料はムクの県産材により、懸念される化学物質汚染に対処。健やかな室内空間を創造するとともに、地域の森林保全・地域林保全の活性化を図った。製材工場、プレカット工場、施工会社、構造設計などすべて半径33キロ圏内にある。この園舎はNEDOの助成も受けており、自然エネルギーを利用して地域・地球環境に負荷を掛けないことを目指している。教室への出入りは南側に広がる幅2・4メートルの外廊下を使用、その上部は屋上緑化を行い、園庭と一体感を持たせている。遊戯室などに採用の丸柱は、製材工場と協力して行った新月伐採樹を使用している。「子どもたちが明るく元気に、健やかに育つ建物として、木が良いことを端的に示している。地域材の活用による大型木造建築が可能であり、住宅スケールのな材を使うことにより、コストも抑えることができた」（石川社長）と語る。

また、同社は埼玉県所沢市に建てた一般住宅「小手指の家」が第2回埼玉県環境建築住宅賞・優秀賞にも選ばれている。

これは自然素材のプレハブ化、パウピオロギー、ゴミを出さない住まいづくりなどをコンセプトにしており、耐力面材にモイスを使ったパネル化により、施工効率、断熱・蓄熱性能の高い住宅を実現した。